



故 河田幸道先生

公益社団法人日本化学療法学会 名誉会員

2022年4月16日 ご逝去（享年87歳）

河田幸道先生 略歴

【学歴・資格】

- 1960年3月 金沢大学医学部卒業
1961年8月 医師免許証下附
1971年3月 医学博士（東京大学）

【職歴】

- 1960年4月 国立東京第2病院にて実地修練
1961年5月 虎の門病院外科
1962年6月 関東労災病院泌尿器科
1967年7月 東京大学医学部附属病院分院 助手
1968年5月 社会保険埼玉中央病院泌尿器科 部長
1972年10月 岐阜大学医学部 助手
1973年4月 岐阜大学医学部附属病院 講師
1974年5月 岐阜大学医学部 助教授
1978年9月 文部省在外研究員（英国ノッチンガム大学微生物学教室）
1983年4月 福井医科大学医学部 教授
1987年6月 岐阜大学医学部 教授
1995年8月 岐阜大学医学部附属病院長
1998年3月 定年により退職，岐阜大学名誉教授
1998年4月 総合犬山中央病院顧問

【学会・社会活動】

- 日本泌尿器科学会（評議員）
日本化学療法学会（理事，評議員，抗菌薬臨床評価法制定委員会泌尿器系委員会委員長，西日本支部幹事）
日本感染症学会（評議員）
日本腎臓学会（評議員）
尿路感染症研究会（幹事）
International Symposium on UTI（co-chairman）

【受賞歴】

- 1998年 日本化学療法学会 第9回志賀潔・秦佐八郎賞受賞
受賞対象：尿路・性器感染菌のキノロン耐性機序とその臨床的意義に関する研究

【主な著書】

- 尿路感染症の基礎と臨床 河田幸道編（日本医事新報社）
尿路の非特異的感染症の診断と治療：新図説泌尿器科学講座 小柳知彦，村井 勝，大島伸一編（メデイカルビュー社）
尿路性器の特異的感染症，原因菌と抗菌薬：ベッドサイド泌尿器科学 吉田 修編（南江堂）

河田幸道先生を偲んで

河田幸道先生は、2022年4月16日にご逝去されました。享年87歳でした。岐阜大学を退官され総合犬山中央病院顧問を辞されたのち、岐阜から京都に居を移され悠々自適の生活を送られていましたが、突然の訃報に接し関係者一同は驚きとともに深い悲しみにつつまれました。

先生は、1960年3月に金沢大学医学部をご卒業になり、国立東京第二病院でのインターンと虎の門病院での外科レジデントの後に関東労災病院にて泌尿器科医としてのキャリアを開始されました。また、先生のライフワークでありました尿路性器感染症研究は東京大学分院時代に開始されました。岐阜大学へは、1972年10月に赴任され、助手、講師、助教授となられ、1978年9月からは英国ノッチングム大学微生物学教室にご留学されました。その後、1983年4月より福井医科大学泌尿器科学講座の教授を務められ、1987年6月より岐阜大学泌尿器科学講座の教授にご就任されました。この間、多くの泌尿器科医を育成され、岐阜県、福井県をはじめ近隣の関連病院へ泌尿器科医を派遣することにより地域の泌尿器科医療の充実と発展に多大な貢献をされました。

尿路性器感染症の研究面では、抗菌薬の開発に尽力され、現在、泌尿器科領域で使用されている多くの抗菌薬の開発に関与されました。特に、抗菌薬の効果を評価する方法の標準化を検討するために、1974年12月に大越正秋先生を代表としてUTI研究会が設立され、その主要メンバーとして参画されました。1975年9月に急性単純性膀胱炎に対する薬効評価基準が完成しましたが、作成の根拠となった基礎資料および尿沈渣標本作成の標準法は、先生によりそれぞれ、『尿路感染症における化学療法剤の薬効評価法について 第1報 単純性尿路感染症における薬効評価基準』と『尿路感染症に対する化学療法剤の臨床効果判定と尿沈渣検査法について』として日本泌尿器科学会誌に報告されています。続いて1977年3月には複雑性尿路感染症に対する薬効評価基準が完成しました。その基礎資料も同様に先生により『尿路感染症における化学療法剤の薬効評価法について 第2報 複雑性尿路感染症における薬効評価基準』と『複雑性尿路感染症における病態と薬効との関係について』として日本泌尿器科学会誌に報告されています。1977年6月には、UTI薬効評価基準（第1版）が発行され、それ以後、1978年6月にUTI薬効評価基準（第2版）、1985年12月にUTI薬効評価基準（第3版）が発行されました。1989年10月にはUTI薬効評価基準をより国際的な基準にすることを目的として大越正秋先生を会長とするInternational Symposium on Clinical Evaluation of Drug Efficacy in UTIが開催され、先生により‘An outline of Japanese criteria for evaluating the clinical efficacy of antimicrobial agents in acute uncomplicated cystitis’と‘An outline of Japanese criteria for evaluating the clinical efficacy of antimicrobial agents in complicated UTI’が報告されました。この間、抗菌薬の効果を評価する方法の標準化のそれまでの業績に対して、1990年にUTI研究会（大越正秋代表）に第1回志賀潔・秦佐八郎記念賞を授与されています。一方、1992年に米国・IDSA/FDAガイドラインが、1993年にはヨーロッパ・ガイドラインが公表されました。それを受けて日本化学療法学会では抗菌薬臨床評価法制定委員会が発足され、先生が泌尿器系委員会の委員長を務められて抗菌薬臨床評価法の国際的ハーモナイゼーションに尽力されました。1997年には泌尿器系委員会委員長としてUTI薬効評価基準第4版暫定案を完成されています。このように、先生は泌尿器科領域における抗菌薬臨床評価法の作成の礎に深く関与され、その後の発展、確立に重要な役割を果たされました。

他方、先生が1987年に岐阜大学に教授として戻られた直後からは、毎年、大学病院および関連病院の尿路感染症患者より分離された菌株を収集してその各種抗菌薬に対する薬剤感受性の経年的な変化を検討されました。特に、ニューキノロン系薬に対する耐性化に着目され、分子生物学的手法により各種菌種におけるニューキノロン系薬耐性に関わる標的酵素の遺伝子変異を明らかにされました。淋菌、緑膿菌、腸球菌などの標的酵素遺伝子のキノロン耐性決定領域の塩基配列を決定し、臨床分離菌株におけるニューキノロン耐性に関わる遺伝子変化を世界で初めて報告するなど大きな成果をあげられました。これらの先生の業績に対して『尿路・性器感染菌のキノロン耐性機序とその臨床的意義に関する研究』として日本化学療法学会より1998年に第9回誌

賀潔・秦佐八郎賞が授与されています。

もう一つの大きな研究テーマとして、男子尿道炎の原因菌の探査に注力されました。当時は淋菌と *Chlamydia trachomatis* は男子尿道炎の原因菌として確立していましたが、男子尿道炎の約3分の1を占める非淋菌性非クラミジア性尿道炎の原因微生物については混沌としていました。そこで、感染症診断における遺伝子診断に着目され、現在では一般的となっているPCR法による微生物の検出法を当時の岐阜大学医学部微生物学講座の江崎孝行教授の協力を得て独自の開発に取り組まれました。1991年以降のPCR法による男子尿道炎患者からの *C. trachomatis*、淋菌および *Ureaplasma urealyticum* の検出は、いずれも本邦最初の臨床検体からの検出報告となりました。さらに、現在では尿道炎の原因菌の一つとされている *Mycoplasma genitalium* の病原的意義の解明のための研究を指導され、男子尿道炎の原因微生物の体系化に多大な貢献をされました。

先生の尿路性器感染症研究の目指す先は、尿路性器感染症の病態の解明と適正抗菌化学療法の確立であり、その方向性は常にぶれることなく研究の地道な努力と着想の先見性により多くの成果を残されました。その一方、医局員、大学院生、留学生には、自由に研究を行う機会を与えて、泌尿器科領域のがんの基礎的研究などにも多くの成果を残されました。

社会活動としては、岐阜県医療審議会委員などを歴任され、学内においては岐阜大学評議員、医学部教務厚生委員長などの役職を歴任されました。1995年8月には、岐阜大学医学部附属病院長に就任され、感染制御部門を含む生体支援センターの設立など附属病院の発展に大きく貢献されました。

学会活動としては、日本泌尿器科学会評議員、日本化学療法学会理事、International Symposium on UTIのco-chairmanなど国内外の学会、研究会の役職を歴任され、1996年には第44回日本化学療法学会西日本支部総会、同年、日本化学療法学会特別企画学術総会【ペニシリンの半世紀】、1997年には第47回日本泌尿器科学会中部総会を主催されるなど指導的な立場からそれぞれの領域の発展に尽力されました。

先生は、1998年3月末に、泌尿器科学教授、病院長として定年退官され、岐阜大学名誉教授になりました。岐阜大学をご退官後も岐阜に残られて関連病院の顧問となられ、外来、手術と泌尿器科の一般診療に携わっておられました。大学時代に先生から手術の手ほどきをうけた関連病院に勤務する医局員たちの中には、先生の退官後も手術の指導をお願いし、それに対して先生も快く手術指導をされていました。その後、完全にリタイアされて、2014年12月に居を京都に移されました。

先生は服装から立ち振る舞いまでが全てにダンディであり、全ての人々に頼りにされる存在でした。先生のご逝去は、岐阜大学泌尿器科のみならず泌尿器科学領域および感染症・化学療法学領域にとっても大きな存在を失うこととなり悲しみに耐えられません。先生のこれまでの功労に敬意を表すとともに先生のご恩に深く感謝申し上げます。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

中部国際医療センター 出口 隆